

Title	「教育」という言葉の裏側
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 22-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4579
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「教育」という言葉の裏側 辻 明典

「せんせい、生徒に話し合いをさせるよりもう少しまじめに授業をやった方がいいと思うよ?」

学部4年生の時、哲学教育のまねごと(?)かもしれないが、教育現場で対話型の授業を試みた時に、一人の生徒からでてきた言葉だ。私は、この言葉が忘れられない。

「学校」という空間において、ほとんどの場合、「問いかけ」や「答え」、ときには「規範」でさえも、教師から子どもたちへと一方的に伝達される。教師の言葉にひたすら耳を傾け、唯々諾々とそれを受け取る姿が、生徒のあるべき姿であるとされ、ときにそれは美徳とすり替えられる。

さらに「学校」という空間は、問いを「あやふや」な状態に留めておくことを、なかなか許そうとしない。「学校」は教師たちに、生徒たちの議論をまとめ上げ、最終的には授業を上手く締めくくるよう、強制力をはたらかせようとする。それを受けた教師たちは、正解のない議論であっても、なんとかそこに落とし所を見出そうとする。

私は、この「学校」という空間や、

そこに潜んでいる「教育」という前提を問い直したい。哲学を学校教場の中で取り扱おうとする現場に足を運ぶたびに、この問いと真正面から向き合う必要性に迫られる。高等学校における「倫理」の授業のように哲学史をなぞるのではなく、言葉を交わすことによって哲学的に考えるという経験は、ときに「学校」や「教室」という空間が生み出そうとする思考の習慣を問いただす。問いただされているのは、教師と子どもの関係性であり、子どもと子どもとの関係性でもある。

「変化すべき対象は子どもたちであり、それは大人たちではない。」 「大人は子どもたちに、完成された『答え』を用意しなければならない。」

子どもたちとの対話を通して、そういった声が「教育」という営みの中に潜んでいたという事実が、ぽろぽろと零れ落ちていく。対話によって哲学を学校教育で試みようとする経験は、「教育」という言葉の裏に潜む、その「前提」とされてきたであろうものの一端を浮かび上がらせようとする。

「子どもは未熟な存在だ…」 「教師は明確な『答え』を用意し なければならない... 「子どもたちが、非道徳的な結論 を用意したらどうする ... | 「議論に教師は介入し、子どもた ちを導くべきだ ... |

学校では、こういった問いかけや不 安が存在することを「前提」として、「教 育」という営みがスタートしているの かもしれない。これらが、「教育」と いう言葉の陰に隠れ、非常に見えにく 校で哲学をするという営みには、こう いった問いが「教育」という言葉の裏 側に存在しうるということを、私たち に気付かせる瞬間がある。

対話という経験を通して異質な他者 の言葉と出会い、自身の思考の枠組み がぐらぐらと揺さぶられつつあること を自覚する。その揺れ幅が大きければ 大きいほど、言葉を紡ぎだすことは困 難を極めるだろう。無理に結論を用意 することは、ここでは求めていない。 あくまで思考の基盤が揺さぶられ、自 身の思考が相対化されていることを自 覚すること自体が、目的なのである。

言葉を交わして哲学することを学校 教育でおこなおうとすることは、想像 以上に困難なのかもしれない。これを 試みようとするとき、私たちは「教育」 の「前提」とされているものにぶつか

るだろう。これと衝突するとき、私た ちはそれにひれ伏し、「学校化」され るという道を選ぶかもしれない。答え のない問いと対峙することに耐えきれ ず、哲学的思考を放棄するかもしれな い。一年前、私も学校で授業をすると いう立場にたった瞬間から、知らず知 らずのうちに、自らを「学校化」する という道を選択してしまっていた。〈話 す‐聴く〉〈問う‐答える〉という経 験を子どもたちに提供し、明確に一つ くなっているような気がしている。学の答えを見いだせないテーマについて ディスカッションをさせたとしても、 こじつけてでも何らかの結論にたどり 着こうとする自分を見つけてしまっ た。

> 洛星高校での試みのなかで、「教育」 と言う言葉の裏側をえぐり出す瞬間 に、私たちは出会った。ある日から私 たちは教室で、車座になって腰を下ろ し、毛糸をまくという共同作業を通し て一つのボールを創り出し、共通の対 象について話し合いはじめた。「ボー ルを持っている人の話に、耳を傾け る」というルールのもとで、進行役と 子どもたちの関係はフラットな状態へ と近づいていく。子どもたちが言葉に 詰まり、沈黙が訪れたとき、私たちは それに寄り添いながらも「何も知らな い」ふりをすることもある。悩み、も がき、沈黙する子どもたちに私たちは

寄り添い、彼らはなんとか言葉を紡ぎ だそうとする。この空間において、「答 え」や「規範」は教師や進行役が用意 するものではない。そこで紡ぎ出され る言葉の方向性は、誰にも分からない。 議論がある一つの結論に収斂していく ことは、ここでは求めていない。異質 な他者との出会いを通し、自らの信念 の基盤が揺さぶられていることを自覚 すること自体が、この場所では重視さ れる。

哲学を学校で行おうとする試みをす ればするほど、これまで私たちが「教 育」をどう捉えようとしていたのかと いう問いと直面せざるを得ない。そう 私は感じている。それは、学校という 場所で哲学をするということがそうさ せるのかもしれないし、特に現在の取 り組みがそれをさらに促しているのか もしれない。

(つじ あきのり)

